

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 北垣外遺跡

1992年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

「北垣外遺跡」正誤表

| ページ | 行  | 「誤」   | 「正」   |
|-----|----|-------|-------|
| 扉   |    | 1994  | 1992  |
| 7   | 29 | 第9号址  | 第2号址  |
| 12  | 10 | 100m  | 100cm |
| 18  | 6  | ナデ洞製  | ナデ調整  |
| 34  | 9  | 後期3棟  | 後期2棟  |
| 36  | 6  | 大阪府陶村 | 大阪府陶邑 |

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 北 垣 外 遺 跡

1992年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

## はじめに

北垣外遺跡発掘調査委員長 長野県上伊那郡南箕輪村教育長 長谷部 五 郎

平成2年夏、地主有賀満氏より「住宅団地を造成したいので北垣外遺跡調査をしてほしい」との申し出がありました。

造成計画ははっきりした平成2年10月、県教育委員会指導主事市沢英利氏、日本考古学協会会員林茂樹氏、村文化財専門委員唐沢勇氏、有賀満氏に集まっていただき、協議の結果、「まず試掘調査をし、その結果によって発掘調査の計画を立てて実施する」ことになりました。

12月2・3日、林氏の指導で試掘が行なわれ、住居跡・弥生・土師・陶器片が出土しましたので、関係者によって12月14日協議しました。その結果、記録保存のために調査することになりました。なお予算については原因者負担を基軸として行ないました。

発掘調査決定のあと、調査団長の林氏が病で長期入院となりましたので、急拠木下平八郎氏に調査団長代理をお願いして進めることになりました。そして、木下氏指導のもと、平成3年4月4日から調査が始まり、4月17日に発掘調査は終わりました。

今回関係者の努力によって、北垣外遺跡の内容が明らかになり、報告書が出されることになったことは、大きな喜びであります。

北垣外遺跡発掘調査及びその報告書の刊行当っては県教育委員会市沢英利指導主事、林茂樹調査団長及び調査員、村文化財専門委員の方々、地主の有賀満氏、発掘作業にご協力くださった村内の方々及び村当局に、大変お世話になりました。わけでも、木下平八郎調査員には現場主任として報告書完成まで、一貫して中心になって尽力いただき感謝のほかはありません。ここに、各位に対して深甚なる敬意を表するとともに感謝申し上げる次第であります。

## ごあいさつ

土地所有者 南箕輪村北殿 有 賀 満

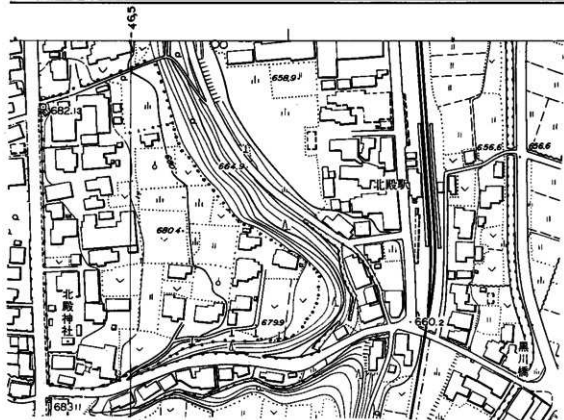
私が生まれ育った屋敷の北垣外は、天竜川の河岸段丘突端部の平面に位置する。

現在も、中河原の水田地帯が眼下に見下ろせ、古代の稲作農業を中心とした頃の住居地として、最適の立地条件であったともうかがえる。この北垣外は、私が終戦後外地から引き揚げてきて、桑畑であったものを、果樹畑と水田につくり直し、耕作を続けてきた訳で表土には数々の土器の破片、石器が見つかり、その都度保存もし、又、果樹園の天地替え作業時では、住居跡とも思える炉石、灰、炭等も等間隔で見つかったりして驚きものである。江戸時代から明治時代であろうと思われる下水道処理場らしいものも1ヶ所で見つっている。昭和30年頃に、当時南箕輪中学校の教諭であった、福沢総一郎先生（伊那市山寺在住）にはご指導にあずかり、極力私なりに保存をしてきたつもりであった。（平成1年教育委員会に委託保管済み）

今回の遺跡の発掘調査に当っては調査団長の林茂樹先生、調査員の木下平八郎先生及び村文化財専門委員、教育委員会の各位には、種々お世話になりました。末尾ながら厚くお礼申し上げます。また、発掘調査によってもたらされた先祖の遺産が更に解き明かされて後世に語り継がれて頂ければ誠に有難い次第であります。

## 例 言

1. この報告書は、長野県上伊那郡南箕輪村大字北殿所在の北垣外遺跡が、3643番地所有者有賀満氏の住宅地造成事業により破壊されるため、原因者が遺跡の記録保存事業を村教育委員会に委託して実施した発掘調査の報告書である。(下図680.4記号地点)
2. 本報告書の監修は林茂樹が行ない、編集は林・木下の協力で行なった。
3. 本報告書は発掘調査によって検出された遺構、遺物をより多く図示することにより資料提示に重点をおいた。文中図の指示を「第1図」の場合「図1」と表示してある。
4. 遺構の製図は、松沢英太郎・木下平八郎が行なった。縮尺は各図に示してある。
5. 土器・石器の実測、製図は木下平八郎が行なった。
6. 本報告書の執筆は、第I章、第V章は団長林茂樹、第II章、III章、IV章は木下平八郎が担当した。及び実測図、写真、等記録保存原資料は南箕輪村教委に保管してある。
7. 写真撮影は、遺構、遺物共に木下平八郎が行なった。
8. 出土遺物は有賀満氏宅に保管している。広く活用されたい。



第2図 北垣外遺跡の地形(1:2500) ………遺跡の範囲

# 目 次

|                       |                     |    |
|-----------------------|---------------------|----|
| はじめに                  | 南箕輪村教育委員教育長 長谷部 五 郎 |    |
| ごあいさつ                 | 遺跡地所有者 有 賀 満        |    |
| 例 言                   |                     |    |
| 目 次                   |                     | 1  |
| 挿図目次・図版目次             |                     | 2  |
| 第Ⅰ章 遺跡の環境             |                     | 3  |
| 第1節 位置及び地形・地質         |                     | 3  |
| 第2節 歴史的環境             |                     | 3  |
| 第Ⅱ章 遺跡保護措置の経緯         |                     | 6  |
| 第1節 遺跡保存についての協議及び措置経過 |                     | 6  |
| 第2節 保護体制              |                     | 6  |
| 第Ⅲ章 発掘調査の概要           |                     | 7  |
| 第Ⅳ章 遺構・遺物             |                     | 8  |
| 第1節 弥生時代の遺構・遺物        |                     | 8  |
| 1. 第1号住居址             |                     | 8  |
| 2. 第2号住居址             |                     | 8  |
| 3. 第4号住居址             |                     | 10 |
| 4. 第9号住居址             |                     | 12 |
| 5. 第9号覆土内遺物           |                     | 12 |
| 第2節 古墳時代及び平安時代の遺構・遺物  |                     | 17 |
| 1. 第3号住居址             |                     | 17 |
| 2. 第5号住居址             |                     | 18 |
| 3. 第7号住居址             |                     | 19 |
| 4. 第8号住居址             |                     | 23 |
| 5. 第6号住居址             |                     | 27 |
| 6. 第10号住居址            |                     | 29 |
| 7. 第1号堀立柱式建物址         |                     | 29 |
| 8. 遺構外出土遺物            |                     | 32 |
| 9. 土師器底部の糸切痕について      |                     | 32 |
| 第Ⅴ章 総 括               |                     | 34 |
| 1. 弥生時代中期の集落について      |                     | 34 |
| 2. 古墳時代の竈神祭祀について      |                     | 35 |
| 3. 古墳時代初頭の土器について      |                     | 36 |

| 挿 図 目 次                 | 図 版 目 次                |
|-------------------------|------------------------|
| 第1図 北垣外遺跡位置図…………… 4     | 図版1 遺跡近景……………40        |
| 第2図 北垣外遺跡遺跡の地形… 例言下     | 図版2 第1号住居址……………41      |
| 第3図 北垣外遺跡発掘区全測図…… 5     | 図版3 第1号住居址土器……………42    |
| 第4図 第1号住居址実測図…………… 9    | 図版4 第2号住居址及び土器……………43  |
| 第5図 第1号住居址土器拓影図…………10   | 図版5 第4号住居址……………44      |
| 第6図 第1号住居址土器実測図…………11   | 図版6 第1・4号住居址土器……………45  |
| 第7図 第2号住居址実測図……………13    | 図版7 第9・10号住居址弥生土器…46   |
| 第8図 第2号住居址土器実測図…………13   | 図版8 第3号住居址遺物出土状況…47    |
| 第9図 第2号住居址土器拓影図…………13   | 図版9 扁円筒形土製品……………48     |
| 第10図 第4号住居址実測図……………14   | 図版10 扁円筒形土製品（内面）……49   |
| 第11図 第4号住居址土器石器実測図15    | 図版11 第3号住居址出土土器……………50 |
| 第12図 第4号住居址土器拓影図…………15  | 図版12 第3号住居址出土土器……………51 |
| 第13図 第9・10号住居址土器拓影図16   | 図版13 第5・7・8号住居址……………52 |
| 第14図 第9号住居址実測図……………17   | 図版14 第5号住居址……………53     |
| 第15図 第3号住居址カマド実測図…19    | 図版15 第5号住居址土器……………54   |
| 第16図 第3号住居址土器実測図…………20  | 図版16 第3・5・10号住居址遺物…55  |
| 第17図 第3号住居址土器実測図…………21  | 図版17 第6号住居址遺物……………56   |
| 第18図 第3号住居址土器実測図…………22  | 図版18 埋甕炉・第1号建物址……………57 |
| 第19図 第5・7・8号住居址実測図… 24  | 図版19 遺構外出土遺物……………58    |
| 第20図 第5号住居址土器実測図…………25  | 図版20 土師器調整痕……………59     |
| 第21図 第7号住居址遺物実測図…………26  | 図版21 土師器調整痕……………60     |
| 第22図 遺構外出土遺物実測図…………30   | 図版22 土器底部……………61       |
| 第23図 第10号住居址実測図……………27  | 図版23 青海波紋を線刻襷……………62   |
| 第24図 第9・10号住居址土器石器実測図30 |                        |
| 第25図 第6号住居址実測図……………28   |                        |
| 第26図 第6号住居址土器石器実測図28    |                        |
| 第27図 第1号建物址実測図……………31   |                        |
| 第28図 第1号建物址土器実測図…………31  |                        |
| 第29図 遺構外出土土器石器実測図…33    |                        |

## 第I章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形・地質（第1図、第2図）

北垣外遺跡は、上伊那郡南箕輪村大字北殿3644～3646番地に位置する。

交通上からは、JR・飯田線北殿駅舎接する西側の段丘崖上の耕地及び宅地一帯であつて、遺跡の範囲は、発掘地点を北端として南北350m、東西160m、約30,000㎡を測る。

この段丘を南殿段丘とよぶ（村誌）が地質学的には「新期土石流南殿面」と称され天竜礫層の上層部を形成し、段丘地形から見れば天竜川氾濫原より数えて二段目の段丘面である。一段目の低位段丘は遺跡の北側近く僅かに残され、明和坂の面となり比高10mを測る。

南殿段丘は、この位置で天竜川氾濫原に急激に東方に突出し、箕輪町木下附近で巾1.2km、松島から北殿まで南北5kmの、広い氾濫原を形成する。これを箕輪湿地帯と仮称する。

本遺跡は、箕輪湿地帯の最南端を望む段丘端に位置し歴史的な要地を占めている。

当遺跡地の地層は、五つの層の堆積から成る。

第I層 地表の耕土層で厚さ25cm内外の黒褐色土。

第II層 黒土層で厚さ50cm内外、腐植土壌の堆積したものである。

第III層 不整合層で部分的である。混礫の黒色泥土層で厚さ2m内外に堆積する。

第IV層 黄褐色粘土層で、厚さ80cm内外のテフラ層で信州ローム最上部のものである。

第V層 天竜礫層で厚さ20m内外を測る。凝灰岩面礫層を多く含むが円礫化が進んでおり、北殿段丘の主要形成層である。

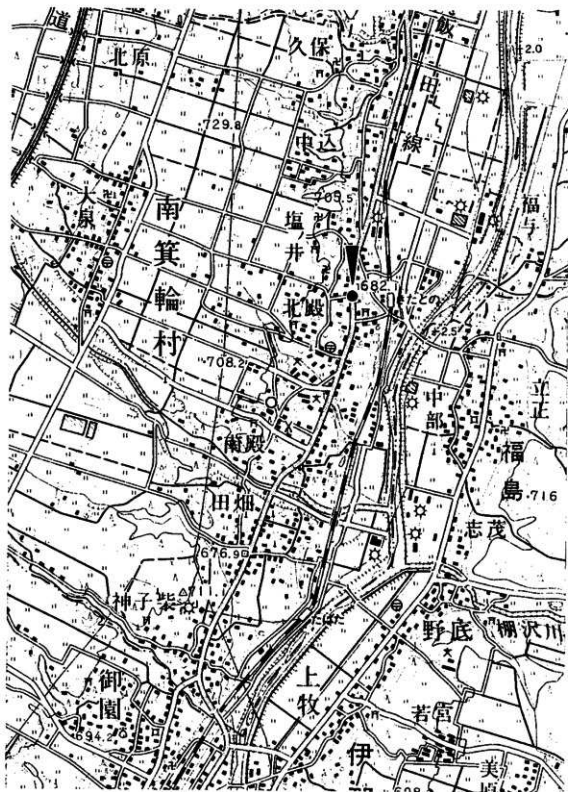
第III層の黒褐色泥礫層の根源は、弥生時代末期に西方の第III段丘（神子柴段丘）村営住宅附近が大崩壊し、その泥流が第III層を形成した。第II層が遺物包含層であった。

### 第2節 歴史的環境

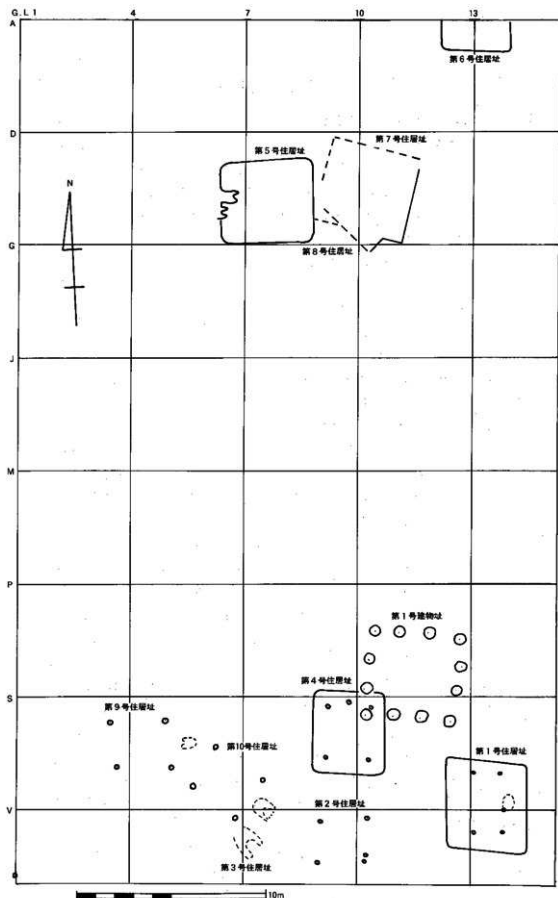
南箕輪村地域内には、遺跡が多く存在するので北垣外の周辺1kmの範囲内で示す。（第1図）

1. まず、遺跡直下に展開する天竜川氾濫原は、昭和20年代の水田造成時におびたしい木製品土器、石器が出土した。箕輪水田遺跡地帯の南端である。この上の段丘面を占める本遺跡は縄文時代以来、各時代に亘る大遺跡である。
2. 北殿地区内の南殿段丘面には、秋葉社（縄文・弥生）・内城（縄文・古墳丘）・東垣外（弥生・古墳）・西垣外（縄文・弥生・平安）が連続状態で分布する。
3. 北接する塩の井地区は、南殿段丘面ではなく僅かな低位段丘と高位の御子柴段丘が発達しており、この段丘面に次の遺跡が展開する。天伯（縄文・弥生・古墳・平安の各集落址）・垣外（縄文）・柴宮（縄文）・山の神（縄文・弥生）・東屋敷（縄文）・向垣外（縄文・弥生・古墳・平安の集落址）で、規模大きく密度が高い。
4. 北接する久保地区は、丸山古墳（子持勾玉・直刀出土）その他の数遺跡が密集している。





第1圖 北垣外遺跡位置圖 (S=1:25,000)



第3图 发掘地全测图 (S=1:200)

## 第Ⅱ章 遺跡保護措置の経緯

### 第1節 遺跡保存についての協議及び

#### 措置経過

- 平成2年8月25日 土地所有者有賀満氏より住宅団地開発に伴い調査依頼があった。
- 〃 10月18日 市沢指導主事、林茂樹氏、教育委員会に於て協議。費用は原告者有賀氏負担とする。
- 〃 11月14日 有賀氏、林氏、調査方につき協議。事務局協議。
- 〃 12月1日 発掘地区、グリット設定。
- 〃 12月2日 調査団結成。試掘開始。
- 〃 12月3日 23グリット調査終了。弥生以降の遺構、遺物出土。
- 〃 12月14日 調査団会議、記録保存必要を決定。
- 平成3年4月4日 調査開始、表土剥ぎ。
- 〃 4月5日 試掘、グリット設定。発掘作業開始。
- 〃 至4月12日 発掘作業終了。各遺構測量。
- 〃 4月16日 有賀氏、調査団協議。
- 〃 4月17日 全体測量。調査終了。
- 〃 自4月25日～5月17日 遺物整理及び調査
- 〃 自5月7日～至5月15日 注記作業
- 〃 5月30日 調査団、事務局協議。

### 第2節 保護措置

有賀氏住宅団地計画区内は、やむを得ず、記録保存措置とすることに決定した。次い

で、急拠、北垣外遺跡発掘調査委員会を組織して措置の執行に当たることになった。

- 委員長 長谷部五郎 教育長
- 委 員 伊藤 亮平 文化財専門委員
- 唐沢 勇 〃
- 日戸 武彦 〃
- 唐沢 實 〃
- 征矢 義明 〃
- 倉田 友雄 〃
- 清水 一清 〃
- 原 輝夫 〃

- 事務局 長谷部五郎 教育長
- 丸山 博志 教育次長
- 藤沢 久人 社会教育係長
- 浦山 文男 社会教育係
- 山崎 晴美 社会教育係
- 田中 聡 公民館主事
- 松沢英太郎 社会教育主事(派遣)

また、考古学学術経験者の協力を仰ぎ、次の通りの北垣外遺跡発掘調査団を組織し、発掘調査を推進した。

- 団 長 林 茂樹 日本考古学会会員
- 調査員 木下平八郎 東洋陶磁学会員
- 小町屋 元 上伊那考古学会員
- 伊藤 和也 成城大学考古学専攻学生

補助員 文化財専門委員 8人

発掘調査協力者

薄田好美、藤沢千春、唐沢富美子、清水浪子、宮垣津きい子、清水たけ子、出羽沢三枝子、伊藤長子、唐沢英子、唐沢良子、加藤貴美子、清水わかえ、加藤昭治、唐沢房恵、

### 第三章 発掘調査の概要

遺跡の水田表土を重機を用いて表土を剥ぐことにした。発掘対象面積は1,100㎡を測り、南北44m東西25mの範囲に亘る。(第3図)

調査区の北西の角をグリットの基点とし、畦道に沿って南方向にアルファベット、東方向に算用数字を用い2×2mのグリットを設定した。第Ⅰ区は北に小道をはさんで隣接する梨畑、第Ⅱ区はA～K、1～15、第Ⅲ区L～Y、1～15、第Ⅳ区A～K、16～32、第Ⅴ区L～Y、16～33の5地区にわけた。今回の調査では、既に試掘調査実施済みの梨畑南側の水田を発掘した。A、E、I、L、Q、U、Wの1、9、13、17、21、25、29とQ列はトレンチ掘とし土層観察用とした。(第3図)

発掘調査第1日 地層状態の確認と遺構の包含状態を探索した。

層位は、第Ⅰ層耕土(黒褐色土)、第Ⅱ層耕土(黒色土)、第Ⅲ層黒褐色土(混礫)、第Ⅳ層黄色粘土(ソフトローム)、第Ⅴ層黒土(黒灰色混礫)であることを確認した。

各グリットを任意のサンプルに選び試掘した結果、中世、平安時代、古墳時代、弥生時代に係る遺構10数基の存在を確認したので完掘による調査を開始した。

第2日 発掘区の南東部g L、L 1-13、U 7、W 7一帯に密集する遺構群。第1号址、第2号址、第3号址の発掘に着手し、それぞれ遺物の出土を多く確認した。第3号址にはカマド2基が併設されていた。或は他の住居址との重複と予想されたが確認できず課題を残した。

第3日 前日に引きつづき精査を進めた結果、第1号址は弥生時代中期の竪穴式住居址、第2号址は、戦後期の開田工事による攪乱が及ぼされプラン規模は不詳、床面等残存遺構出土の遺物により、弥生中期の住居址と判明した。第3号址は、同じく開田工事により遺構の大部分は攪乱が及ぼされていたが、僅かに西壁の一部及び床面とカマド跡2基が残存しており、床面上から遺物が螺旋状態で発見されたのは幸いであった。遺物の中に学会未知見の大形扁円筒形土製品が検出され、調査団の関心を集めた。第3号址は古墳時代後期の竪穴式住居址と判明した。

第4日 第1号址より第3号址の位置に東接する第4号址、これより20mの位置、g L、E 6に存在が確かめられた第5号址、第6号址の発掘に着手する。第4号址は弥生時代中期の竪穴住居址、第5号址は古墳時代後期の竪穴住居址で、第3号址と同じ時期でカマドが同じく二基並設されていることが確認された。

第5日 第1号址と第3号址との間に残欠状態で確認された第9号址、第10号址の精査にとりかかる。また第5号址を重複し切合関係で確認された第8号址およびこれと切り合う第7号址の精査を進めた結果、第7号址は、カマドが2基、西壁に沿って並設され第3号竪穴住居址と同時期の竪穴式住居址と判明した。第9、第10号址は、開田工事による攪乱が甚大で、プラン規模は不詳で、主穴の一部が確認されたに過ぎず、床面レベルから出土した遺物により、第9号址は弥生中期の、第10号址は、平安時代後期の竪穴式住居址と判定された。

第6日 第3号竪穴住居址のカマド周辺床面を北方に追求、精査したが、同じ住居址床面のレベルに構築されたものと判定し、焚口を東に向け、西壁に2基が並列してつけられたものであることを確認した。また、第4号址と切り合う柱列址を精査し、3間×3間の堀立柱式建物で、古墳時代後期に所属するものと判明した。

第7日 終日全遺構の全測に従事した。

以上で現場における発掘作業を終了した。

## 第Ⅳ章 遺構・遺物

### 第1節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1. 第1号住居址（第4、5、6図 図版2、3）

GLU-13に検出された住居址である。プランは南北方形に近くやや長い長方形で、規模は、東西4.3m南北4.8mを測る。壁高は水田造成時に上面が削り取られており、構築時の高さを測ることはできないが、東、南壁で4cm～14cm、西、北壁で15cm前後が残存しており、状態は良くない。

床面は、灰褐色土層を掘り込んで作られており、柔らかに生活面は不明確である。

柱穴は、4本で東西が壁より1.5m前後中心線に近く、南北は、南側が1.2m、1.2mを測り、柱間は、東西1.2m前後、南北2.8mで、掘り込みは10cm～30cmと不揃いである。

炉は、東側の柱穴を結ぶ線上のほぼ中央にあり、60cm×80cmの楕円形状に残存しており地床炉と考えられるが、焼土の南隅にかめの下半部が正位に置かれている。内部に少量の灰と焼土が残っており、火種貯蔵の施設であろうか、本址の西3mにある第4号址にみられる後期の盛行する埋燗炉の先駆なすものかと考えられる。

東壁の北隅と、中央やや南寄りに川原転石が壁に接して立てた状態で置かれている。北西壁近くと、P4中央寄りにも川原転石がある他には何もない。

遺物（図5、6・図版2、3） 遺物の出土は少ない。甕と壺が主な器種である。

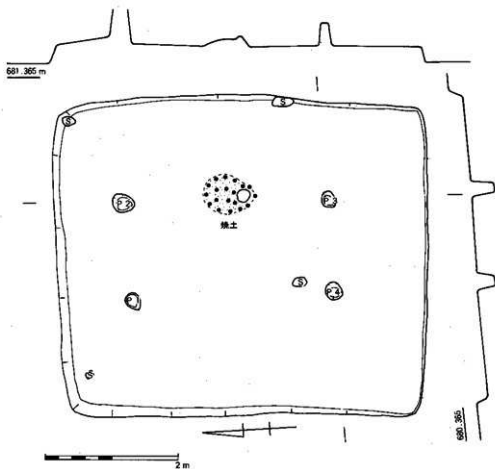
土器のみで石器の出土はない。甕（図5）は口縁部に縄紋を施紋し頸部から胴部にかけて、櫛状工具で簾状紋と波状紋を、胴部から下半に沈線で綾杉紋を組み合す。壺（図5、図版6）は、大形（図6-1、図版3）のものは無紋で、胴下半部を欠く、表面は丁寧なヘラ仕上げで、内面は刷毛状工具による調整で、焼成良好である。小形壺（図6-3 図版3）は、口頸部と胴下半部を欠く、前面に朱彩が施されており、胴経最大部の位置に4筒の突起があり、焼成良好な壺である。壺（図6-2、図版3）は、頸部のみで、頸部に三段の並行沈線を入れ、その間を短線紋で生め、その下部に大振りの波状紋を置き、その波状紋の間を細かい波状の沈線で埋める。

埋燗炉（図6-9、図版3）は、甕の低部から立ち上りの部分のもので、器面をヘラ調整で仕上げた焼成良好な土器である。遺物よりみて弥生中期終末の時期である。

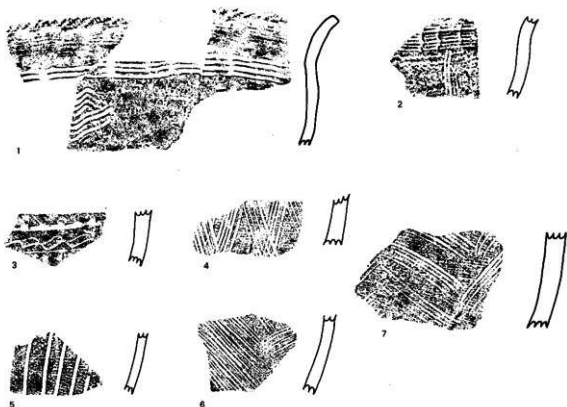
#### 2. 第2号住居址（図7、図版4）

遺構（図7・図版4）

本址は、GLW9に検出された住居址である。プランは水田造成時に上面を削り取られており東と南側は耕作で、西側は第3号住居址の床面と重複しておりプランの確認はむずかしい。床面は礫まじりの黒褐色土で凸凹があるが固く良好な状態の床面が柱間に残存している。柱穴は5本検出されたが、東南のP3・P4は他の3本より小さく柱間が20cmと接近しており、普通の状態の柱穴のありかたと違うようだ。西側P5の北側近くに50cm×70cm



第4図 第1号住居址実測図 (S=1:60)



第5図 第1号住居址出土土器拓影 (S=1:2)

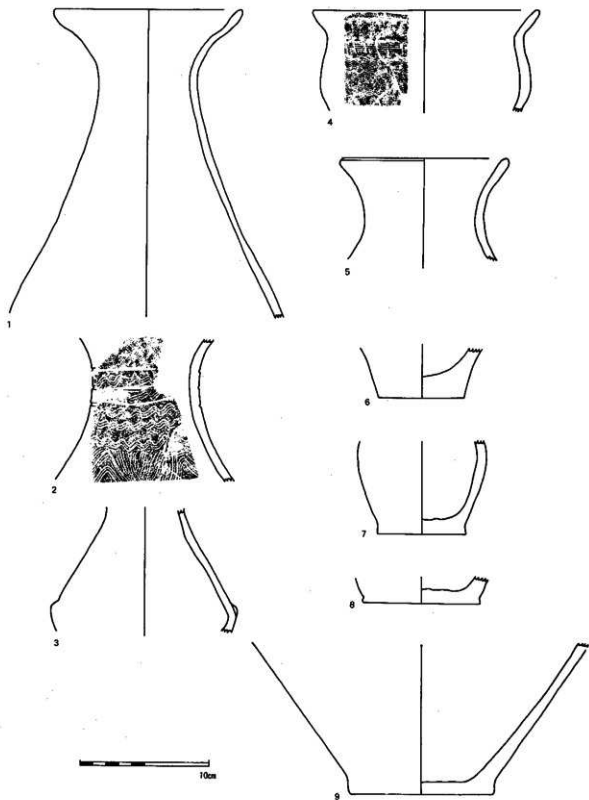
の楕円形状に焼土が残存しており、3箇の礫が三角形状に焼土の中に置かれている。炉とするには柱穴の近くであり不自然である。遺物の出土は少ない。

土器(図8-1)は完形土器が1点ある。台の上に少量の粘土を採り小形の器に仕上た手ずくね土器で、内外面共荒らっぽい調整で、内面は指先が器面から回転せずに離れた状態がそのまま残っており、外面は凸凹がはげしく荒らっぽい仕上の土器である。台付小型甕(図8-2)は、台部と立上りの1部分で上部は欠損している。器形のわかるものはこの2点である。

(図9)の1は、器面に縄紋を全体に施紋し「」状に沈線を重ね、ボタン貼付紋のあるもの、2は、簾状紋、3は、胴下半部の沈線の端部、4は、第3号住居址と重なりとおもはれる位置からの出土で、口縁部に縄紋を施紋するもの、時期は、弥生中期末葉で、下伊那の恒川式併行期である。

### 3. 第4号住居址(図第10-12図・図版5・6-2・18-1図)

遺構(第10図)本址はグリットT-9に検出された。プランは隅丸長方形で、規模は東西4.4m×南北5mを測る。壁高はこの住居址も水田造成時に削られており残存する壁は5cm~12cmと高くない。



第6图 第1号住居址出土土器 (S=1:3)



床面は砂質の黄色土で柔らかく生活面がとらえにくい。主柱穴は4本である。炉はP1・P2の軸線上中央北壁寄りにあり甕の底部を打抜いたものが埋設されており内外に焼土が残る。覆土中に廃絶後投げ込まれた礫が数十箇残存していた。

遺物(図11・12・図版6-2・18-1) 遺物の出土は少ない。(11-1)は埋甕炉で検出時には口縁部の1部が残っていたが埋設時にはほぼ完形に近いものであろう。口縁端部に刻み目と縄紋を付けるものがある。(12-6)は第2号住居址出土(9-1)と同一紋様である。石器(11-3)は磨製の環状石斧である。時期は弥生中期末葉と考えたい。

#### 4. 第9号住居址(図22・24-1・図版16-2、3)

遺構(図14)本址は、グリットT-4に検出された。調査区西にありレベルの一番高い場所である。水田造成時に表土が90から100m位削られた場所で、柱穴と炉の火床が残った住居址である。

プランは不明である。主柱穴はP1・2・4・5の4本と考えられる。P3・6・7はこの住居址に伴うものかは落ち込んでいる土砂の色にわずかの差がみられるので別の時期としたい。

造成時に耕土の移動による遺物の混在が認められ(図13)等にみられるように甕の破片で、(弥生土器片恒川式新期に比定できる)が多く出土した。

(図24-1)、図上復元できるものはこの3点だけである。この遺物もこの遺構に伴うか断定できない。(図版7-2・3)

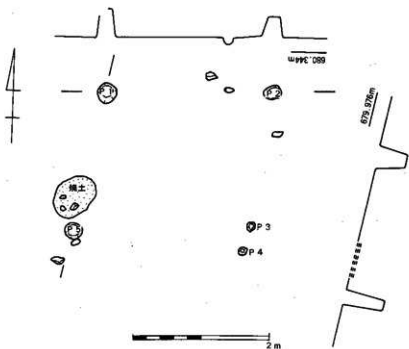
#### 5. 第9号覆土内遺物(図13・14・29-1・2・図版7・18-1-3・19-4)

遺構については次項のところで説明する両住居址共に調査区の西南隅近くにあり、第3号・4号住居址に接近しており、調査区中では開田工事で最も削られた地区であり上面の攪乱がひどい場所である。

遺物 覆土から弥生様式の土器片が出土した。(図13-1・2)は口端部に縄紋を施紋しその真下と頸部にボタン貼付紋のあるもの。(図7・8)は口縁部に縄紋を施紋するもの。

(10~15)は4本か6本の櫛状工具による波状紋、短線紋、綾杉紋を胴部に施紋するものである。(3・4)は壺で3は後期に多く見受けられる壺の口縁部であろう。4は頸部である。

(図22-1-6)はグリット出土である。1は短線紋の土器で、口縁部内外に口端部に向けて櫛状工具で沈線が引いてある。この様な手法は数多い土器片の中でこの1点だけである。6は波状紋の複雑な組合せの紋様である。(29-1・2)は共に甕形土器で、図上復元可能な土器片である。1は第4住と第10住の間に、横転した状態で片面を削り取られた恰好で出土した。肩から胴部に掛けて櫛状工具で短線紋が画かれている。2は口縁部が大きく外反する頸部から胴部に波状紋が画がれる。



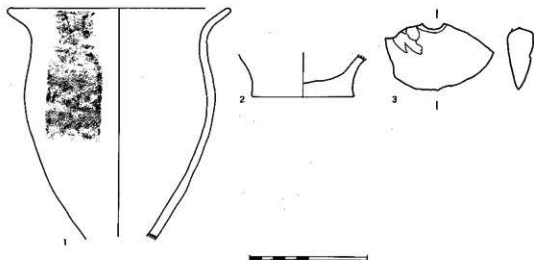
第7图 第2号住居址实测图 (S=1:60)



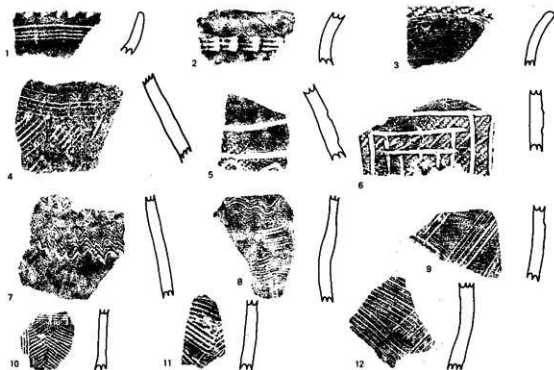
第8图 第2号住居址出土土器实测图 (S=1:2)

第9图 第2号住居址出土土器拓影 (S=1:2)

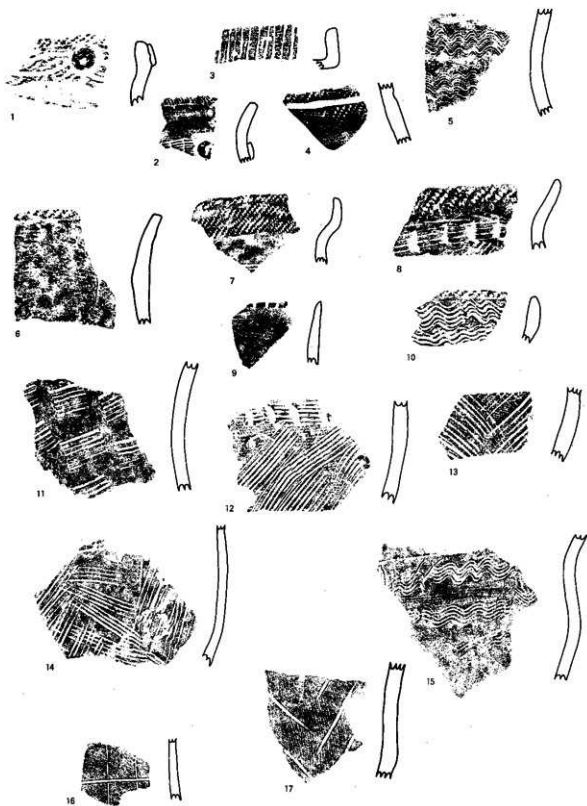




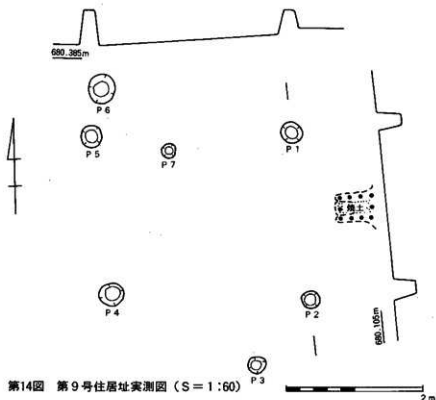
第11图 第4号住居址出土遺物 (S=1:3)



第12图 第4号住居址出土土器拓影 (S=1:2)



第13图 第9号住居址土器拓影(1~5) 第10号住居址土器拓影(6~17) (S=1:2)



## 第2節 古墳時代及び平安時代の遺構・遺物

### 1. 第3号住居址 (図15～18・図版8～12)

遺構 8 L, W7に検出された竪穴式住居址である。(図15)

改田工事で床面を残し、上層は攪乱され壁も削平された状態であったが、幸いにも西壁にカマド址及び炉材、焼土が残存していた。プラン、柱穴等は不明で、焼土部に炉の袖石とおもわれる石が2箇ありその規模は1.5m×1.3mで、これをA号とし、1m間隔で北側に並設された0.4m×0.7mの石と焼土魂のものをB号とした。

遺物はカマドA号の前面と北側に土師器が蜷集状態で多く検出され、南側床面に須恵器杯蓋や須恵のハソウが横転した状態で出土し、かまど焚口とおもわれ床面に扁円筒形土器が上面を上にし出土した。(図16-1・図版8～10)

遺物（図16-18図・図版9～12）

遺物の出土は上述のように形、質とも多かったが、まず特筆したいのは「有孔扁円筒形土製品」（図16-1・図版10）である。断面形は、縦7cm、横13cmの胴張長方形（図16-1）を呈するが部分により長楕円形を呈する。長さ47.5cmを測る土師質の筒形土製品で両端は切断状に調整され、器壁は厚さ10mm～20mmを測る。外面と全周面が篋状工具による縦方向のナデ洞製が加えられ、端部に指おさえ痕が残されている。主面と思われる扁平な片面中央部の中軸線に沿って径7mmの円孔が4箇、直列状に穿孔されている。

穿孔は焼成前に加工されたもので器壁を貫通している。

内面は粗製で、巾3cm内外の粘土紐を輪積みして接続したままの状態（図版10-3）である。用途は不明である。土師器では、甕8個、壺1個、坏2個、高杯1、甕1個（図17・18-9・12）で、甕は長胴が多い。

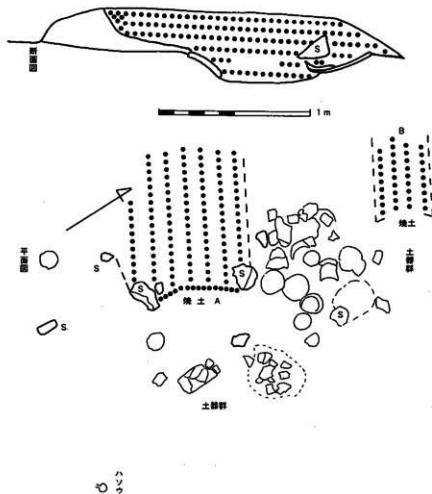
須恵器（図18-7～10）は4点あり、蓋杯とハソウがありカマドの前部床面から出土した。時期は7世紀初頭前後と思われる。

石器（図24-5・6）（図版16・6）は覆土が出土した。5は蛇紋岩質の丁字頭勾玉の頭部断片で、中央に径6mmの孔をあげ、頭縁から両面に中央孔より放射状の不規則な沈線が刻まれている。6は硬質の粘板岩の原石を打ち欠き棒状としたもので、部分的に磨かれており、10数ヶ所に刃部による傷が付いている。（以上林補記）

## 2. 第5号住居址（図19・20・図版14～16）

遺構は、グリットE-6に検出された住居址である。プランは南北4.65m、東西もほぼ同じ位の方形の住居址と考えられる。東側に第8号住居址があり、遺物の出土状況もおおむねその範囲の中にある。壁は直に近く南壁で40cm前後、北壁で50cm前後を測る。床面は、小礫を多量に含んだ砂礫層を掘込んでおり床面は堅く締らず非常に悪い、柱穴も不明である。かまどは西壁に2基あり、南側が小さく規模は70×70cmで石組かまどである。内部よりかめの破片が出土した。「B号」とする。壁外の煙出し近くに18×35cmの菱形の平石が置かれている。その右側にあるかまどは90×100cmの石組かまどで「A号」とする。内部にかめの破片が落ちこんでいる。遺物はかまど周辺に多い、東壁寄中央部に2ヶ所焼土が残存する。石芯粘土製カマドの大小2基の併設は注意すべき事象である。

遺物（図20・図版15・16-1）は多く、土師器甕8箇、坏2箇、高坏1箇を数えるが、須恵器はなく、甕の量が卓越していることが注目される。甕は大形品5箇、小型品4箇の割合である。大形品は口縁の立ちあがり直線状に大きくカーブし、口縁部から急激に膨み、最大巾が中心に位置する器形を呈し、小型品は口縁の反りが少く胴のふくらみも少いのが対照的である。（第20図、4～11）。高杯は、脚の裾がわずかに広がる程度で。杯は底部端に削りをめぐらせ、わずかに高台状を形成する。（同図、1～3）いずれも伊那市鳥居田遺跡11号住、駒ヶ根市中通り下14号位の出土品に類似し、信濃の古墳時代第V期終末、または奈良時代初頭に比定でき得る。



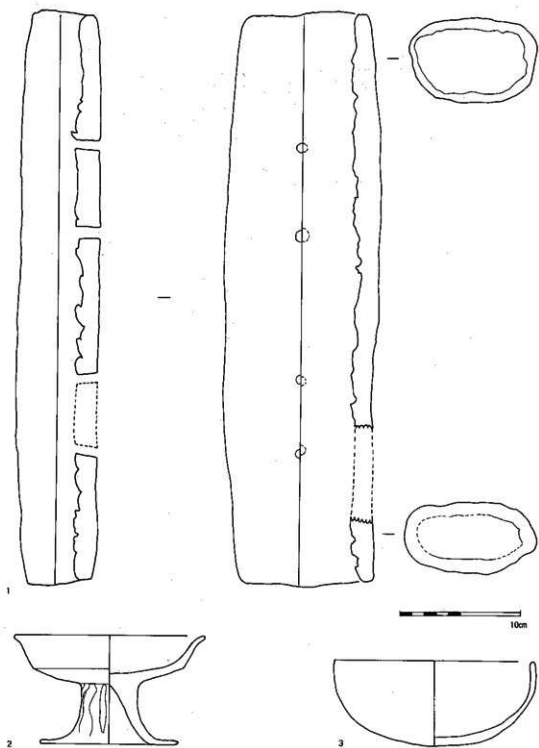
第15図 第3号住居址カマド址実測図

### 3. 第7号住居址 (図19・21 図版12)

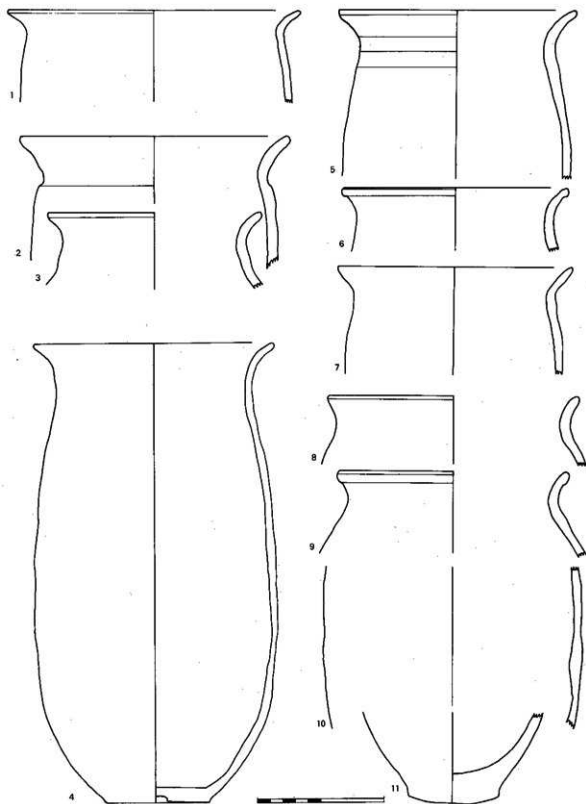
**遺構** (図19 図版13) は、第5号住居址の東にあり、プランは東側で5.6m、南側は1m、北側で3m余残存しており他は不明である。東側の壁の状態よりみて方形胴張の住居址と思われる。柱穴、かまどの位置は不詳である。第5号住居址東側に残る焼土がかまどの位置と考えられないこともないが、第8号住居址との関係もあり即断できない。北壁直下に礫が集まった場所があり、その周辺に焼土がわかに認められるが、砂礫層で焼土の量も少なく石組もくずれておりかまどときめかねる。廃絶後投げ込まれた転石が数10個あり、屋内施設、器具ともに撤去清掃された形跡が認められる。

**遺物** (図21) 出土量は少ない。土師の杯、甕の破片のみである。石器は2点あり、砥

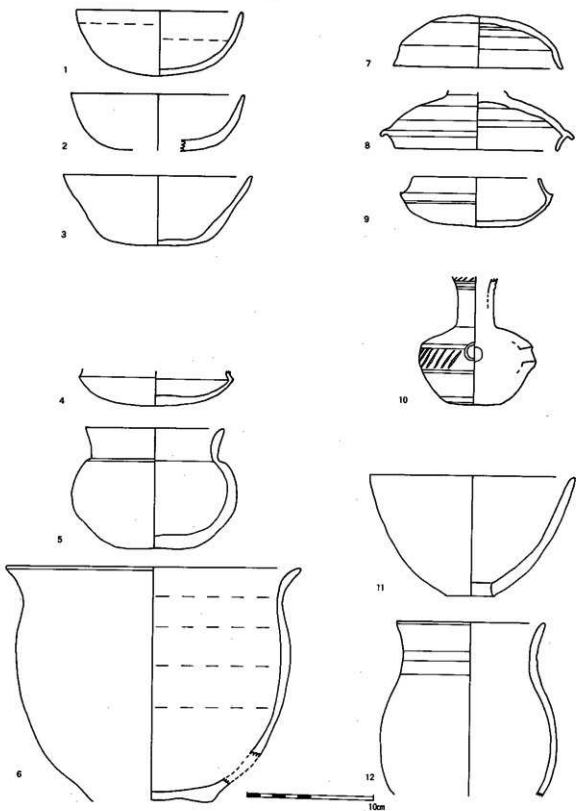




第16図 第3号住居址出土土器 (S=1:3)



第17图 第3号住居址出土土器 (S=1:3)



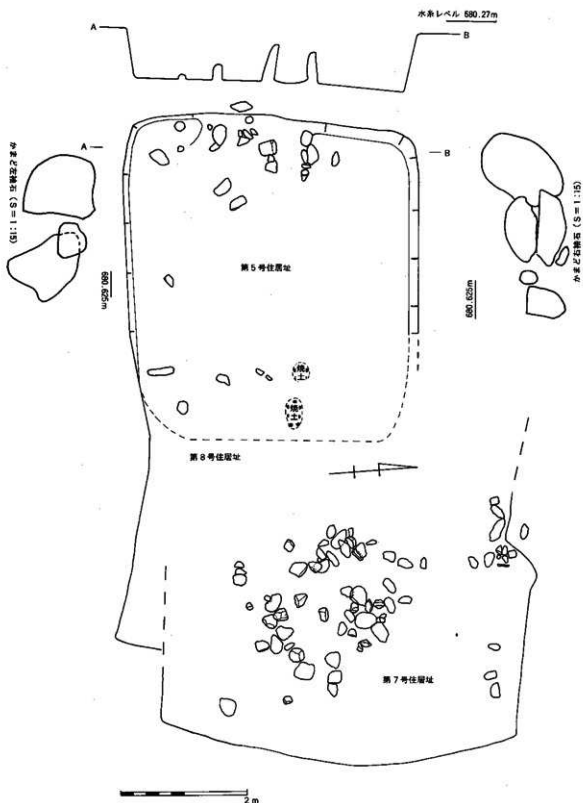
第18图 第3号住居址出土土器 (S=1:3)

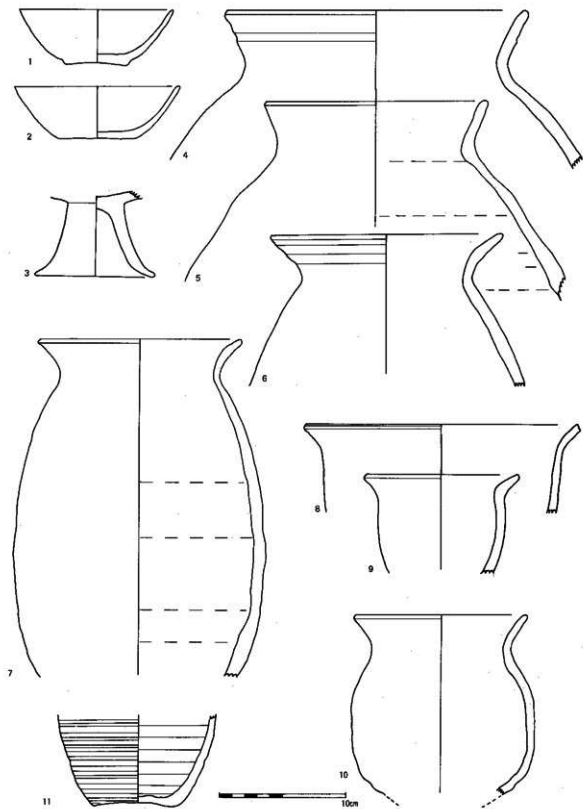
石(21・10)で、一部が鏡のように艶があり硬い石を使っている。スクレイパー(21図11)はチャート製で縄文時代の遺物である。

出土した土師器は、甕3個、杯6個(第21図、図版第15)で須恵器は目当たらない。甕大形長胴のもの2点(第21図8、9)は、やや外傾する口縁が直線状で比較的に弱い。胴部の膨みも弱いのが特徴と思われる。小型甕はこれに反して口縁外傾度も強く膨みも曲線的である。杯は大形のもの2個、小型のもの4個であるが、前者は盃形に近く底部のみの残欠色であるが、経10cmの底面に木葉痕の圧痕が印されており、祭祀用に用いられたものと推定される。床面は一応整理された痕跡があり、多量の自然石が廃棄状態(第19図、図版13)であったのが、カマド石芯用の石が遺されたものであろうか。古墳時代第V期の新しい時期に相当する。

#### 4. 第8号住居址(図19 図版13)

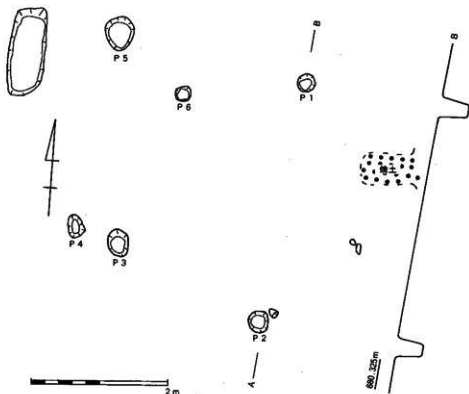
遺構 本址は、第5号住居址と第7号住居址の中間、両住居址に重複して検出された。プランは不明で、南東隅のコーナーの部分がわかるもので、床面は5号址、7号址と同一面上にあるもので、小礫を多く含む黒褐色砂礫層中に構築されており、生活面は堅く締っておらず捕えにくい。柱穴等の施設は不明である。第5号址の東壁とおもわれる中央付近に残る30×60cmの焼土は形態よりみてかまどの火床であろう。遺物は殆ど見当らず時期決定はむずかしいが、第5号址、第7号址よりは古いと思われる。





第20図 第5号住居址出土土器 (S=1:3)





第23図 第10号住居址実測図 (S = 1:60)

# 5. 第6号住居址 (図25・26 図版17・19-3・22-5・6)

遺構 (図25 図版17-5) 本址は、グリットA-13に検出された。今回の調査では北端にあり大半が用地外になる住居址で、プランは方形胴張りで、南壁は角から角まで3.4mを測り、東壁は1.7m、西壁の1.5mを調査した。この地区は土層の堆積の深いところで、遺構の保存状態は良い。壁高は東側で25cm、西側で29cm、南側で26cm、壁の状態は砂礫層を掘込んでおりよくない。床面も悪く掘ればくずれて生活面の確認がむずかしい。かまどは調査区外に存在が考えられる。柱穴は3箇所検出された。

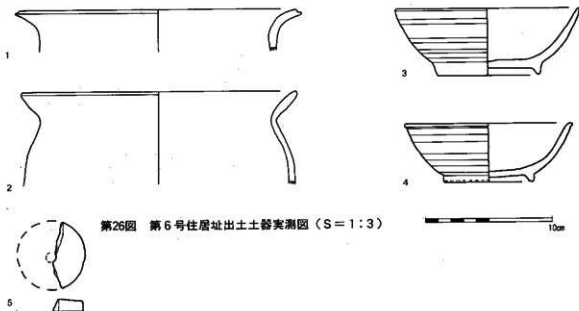
遺物は壁際に多く覆土中に弥生期の遺物が混在する。時期は10世紀である。

遺物 (図26 図版17・19-3・22-5・6) 土師器高台付碗 (21-3) 口径14.6~15.5cm、高さ5.4cm、高台径8.1cm、高さ1cm、高台内は糸切り底である。内面内黒で焼成良好、甕 (27-1・2) 共に口縁部である。

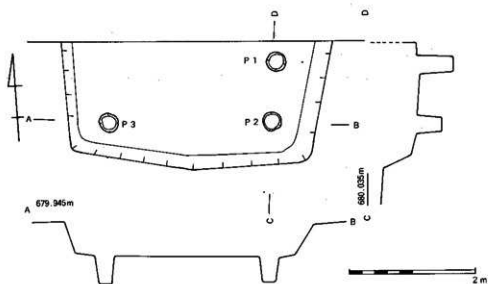
灰釉碗 (21-4) 口径13.4cm、高さ4.7cm、高台径7.3cm、高さ0.6cm、ヘラ切底である。見込全面に淡緑色の灰釉が刷毛で美しくかけられている猿投産の碗である。

石製紡錘車 (27-5 図版19・3) 砂岩製で外径は推定5.5cm、厚さ1cm、中央に径0.7cm前後の孔がある。





第26図 第6号住居址出土土器実測図 (S=1:3)



第25図 第6号住居址実測図 (S=1:60)

## 6. 第10号住居址 (図23・24-2~6 図版16・4~7)

遺構 (図23) 本址はグリットU-7に検出された。戦後の改田工事により床面近くまで削られており、かまどの焼土とピットのみを残す住居址である。第3号住居址と重複しており、かまどは同一方向に1m間隔をもって並んでいる。

この住居址もプランは不祥である。焼土の左右手前にあるP1・P2は主柱穴としては位置的によいと考えられるが、他のP3~P6は不自然である。P5近くの長方形の土坑は遺物が無く中の土砂もP1・2と違っており時期不明である。

遺物 (図24-2~6) 図版16-4~7) この住居址の遺物も各時期の遺物が混在している。

土師器は、(図24-2・3・4)がある。2は柱状高台付の杯(皿)で最近の出土例は、駒ヶ根市反目遺跡、第2号住居、伊那市鍛冶垣外遺跡第4号住等がある。共に11世紀末とされている。

(図版16・7)は覆土から出土した白磁の鉢の破片である。景德鎮陶資考古研究所の劉新園氏のご教示によれば、南宋(12~13世紀)南方の窯で焼かれた白磁である。胎土は柔らかい感じで、ところどころに空間が目立つ、釉調は長い間土中にあった為か淡い黄色を呈しており貫入がめだつ、

内面に片切彫の劃花紋が施紋される。厚さは4mm前後を測る。伊那谷で数少ない出土例である。

## 7. 第1号堀立柱式建物址 (図27・28 図版18-4)

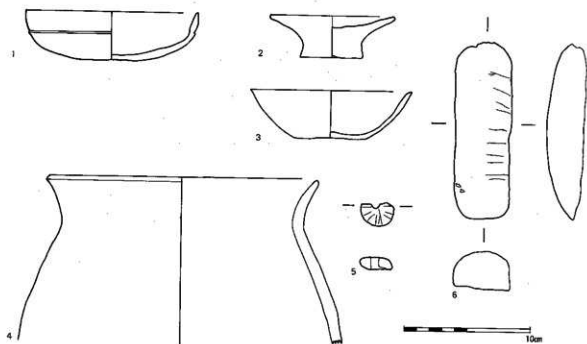
遺構 (図27 図版18-4)

本址は、グリットR-11の周辺に検出された。本調査の前に実施した試掘の段階で、土層観察のトレンチを設定、遺構の少ないと考えられるQ列を選んだ。調査上の理由からバックホーによる排土を行った結果掘り過ぎの状態となったが、柱穴の底の部分は残すことができた。

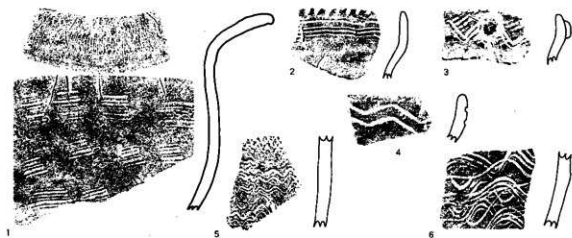
規模は、3間×3間で、1辺が柱穴の真から真まで4.6×4.7m測り】12柱穴で構成する正方形プランの堀立柱様式の建物址である。床面は砂質褐色土で柔らかく痕跡は認められない。

掘い方は径が50cmから70cmで、大きさに違いがあるがほぼ円形に掘り込まれており、深さは南側の4本が60cm前後、北側の4本は90cmから100cmを測る。時期は7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

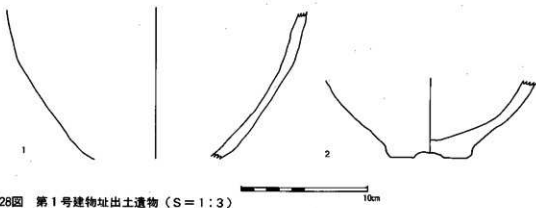
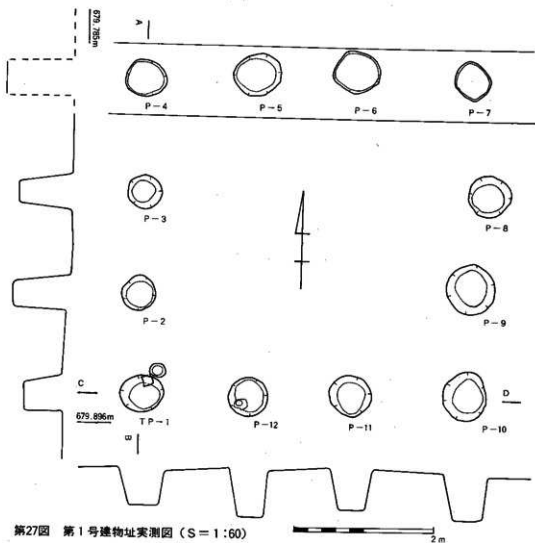
遺物 (図28) 甕の胴部の破片と、底部がP1・5・12から出土している。



第24図 第9号住居址（1）・第10号住居址（2～4）・第3号住居址（5、6）出土遺物



第22図 遺構外出土遺物（S=1:2）（グリット）



## 8. 遺構外出土遺物 (図29-3~6 図版19-1・2)

### (1) 土器 (図29-3・4 図版19-1・2)

灰釉鉢 (図29-3) は水田の畦からの出土で、高台から立上りの部分で、口縁部に片口が付くこね鉢の底部である。

土師器壺 (図29-4 図版9-1) この壺は、北に隣接する梨畑より耕作中に出土した。口縁部が欠損している。残存高は25cm、胴部最大径26cm、底部径は摩滅がはげしく製作時の径の計測はできないが7cm前後であろう。胴部に6.5×11cmの穴があいている。穴の状態を観察すると、内面から外に向って力が加えられた状態が破砕面にみられ、穴が開けられた後も使用された痕跡が認められる。(この壺は有賀氏のところに今1点の礫と共に保管されている)

### (2) 石器 (図29-5・6)

石斧 (図29-5・6) 2点出土している。耕作土を排土している時点で出土した。共に硬砂岩製の打石斧である。遺構に伴なわないので時期は不明である。縄紋後期土器片を伴った。

(3) 刻紋を有する礫 (図版23) 長径50cm内外の砂岩質円盤状礫の縁辺部に、弧の長さ7cm内外の青海波紋様を沈刻してある。発掘地点より20m北方の梨畑耕作中に深さ40cmほどの土中から出土した。一定間隔をもって位置し、総数44箇が保管されている。土師器壺 (図版19) と同地点か出土した。(発掘者有賀大翁氏談)

## 9. 土師器底部の糸切痕について (図版22-3)

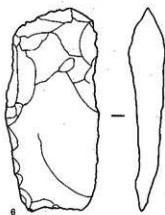
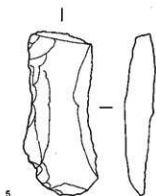
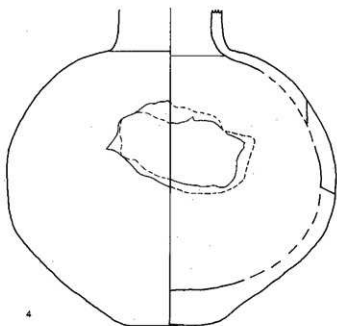
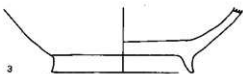
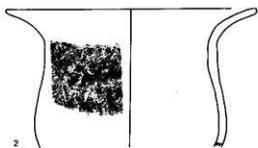
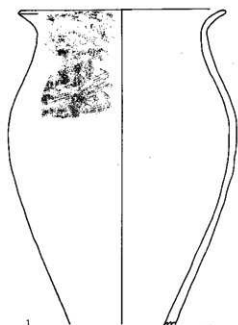
土師器成形終了時、轆轤から切り離す時に使用する道具、即ち糸について土岐市在住の今井絲瑞夫先生に伺ったところ、お忙しい中にもかかわらず次のような御教示を頂いた。

「瀬戸美濃地方では、藁みご (にご) を作るのが古くからの習慣であったが、現在ではこのような藁みごを使用されている陶芸家はおらないとのこと、現在は織物の水系を使用しているようで、織物の糸では藁みごのように明確な糸切痕を示さないようです。

その糸の製作について、稲の穂をすぬいて、その茎の部分をさいて撚りを掛けて作ったよう得手轆轤による量産成形が終るとこのような糸作りがなくなるようです。

糸が乾くとこわく (かたく) なるので、水に浸して柔らかくして使用する。織物と違ってこわく (かたく)、したがって糸切に使用した場合実に鮮明な糸切痕が残るようです。

(文責 木下)



第29図 遠構外出土遺物 (S=1:3)



## 第V章 総 括

北垣外遺跡の一部1100㎡（南北44m×東西25m）の全面を発掘した状況は、以上に詳述した通りである。河岸段丘端の狭い範囲にかかわらず、4つの時代に営まれた住居跡が重層的に存在し、各時代を通じ、重要な遺構、遺物が出土したことは、大遺跡北垣外のシンボルとして、氷山の一角を示すものである。幸いに東南部に耕地として残されている遺跡はその中心部であり、広範囲であることを喜びとしたい。

今次の発掘調査で検出された遺構は総計11基、その大部分は堅穴式住居跡で10軒、高床式倉庫1棟であった。

時代別に分けてみると、弥生時代中期4棟、古墳時代後期4棟、別に堀建柱式倉庫1棟、平安時代後期3棟である。いわば古代の家の時代別展示場のようなものである。この地が古代人の生活の場として、最適の条件を備えていることを示している。それは弥生時代以来、人々の生産生活の基盤が米の生産であり稲づくりにあったからにほかならない。

北垣外遺跡は、北段段丘の北端に位置し、眼下に広大な箕輪の天竜川沖積面を見おろすことができる。弥生人はここに家を建て、眼下の天竜川原の湿地帯を耕し、水田を営み続けた。弥生以来2000年間この営みは次第に発展して今日に至ったのである。

J R北殿駅の東から天竜川に至る水田の下には弥生時代以来、各時代の水田が積み重なって埋蔵されている可能性は極めて高い。

今回の発掘調査によって判明した北垣外遺跡は、上伊那の過去の発掘事例に照しても、画期的な事象が多いのに驚くのである。その歴史的な重要性和貴重性の二、三についてまべてみたい。

### 1. 弥生時代中期の遺跡について

弥生時代中期集落の発見は、上伊那初の事例である。弥生式文化とは、とりもなおさず水稻農耕の生活文化であるが上伊那への波及は他の地域に比べ今まで確実に把握されていなかった。

即ち、弥生文化は、紀元前500年頃、北九州の一角に発祥し、次第に東方へ波及し、近畿の各地、そして濃尾平野に定着し、更にここを基地にして中部山岳地帯や関東に拡散していくのである。長野県域では、天竜川沿岸を北上し、いち早く伊那谷南部に定着する。

第一波は濃尾の条痕文系土器や、東海の遠賀川系土器を使った人々の移住によってもたらされ定着した。その跡は南信濃村や喬木村阿島の遺跡に見出される。また著しく条痕文系の色彩の強い壺王式系の土器は上伊那にも足跡を残している。それが駒ヶ根市荒神沢遺跡である。

第二波として、遠賀川式系と<sup>(長 3)</sup>水神平式を併せ持つ林里式土器（下伊那郡豊丘村）を持つ文化が上伊那郡中川村の刈谷原遺跡に流入し定着する。

第三波の岩滑式文化は上伊那を通過して岡谷市の諏訪湖畔で発展する。これが有名な庄

の畑式土器文化で、同類遺跡から貨泉を出土しており注目される。

このような情勢の中で、弥生中期後半の時期になると、前述の阿島式土器やこれから派生した北原式文化<sup>(83)</sup>が飯田以北で発祥するが上伊那の地には北進せず、いわば第三波、第四波ともに上伊那は空白地帯と目されてきた。

ところが今回の調査で土器を伴って住居址群が発見されたことは既成の概念を覆すものでこの点まことに意義深いがある。竪穴式住居跡は4軒だが、残念ながら戦後の開田工事により、攪乱、破壊が及ぼされ、第1号址と第4号址のみその被害から免れ、住居構造の概要を知ることができる。この住居址は、発掘区の南半部に蟬集し、北側に濠が掘られており環濠集落と思われる。北原式土器を伴う第1号址(図版2、3 図4、5)は、一辺4.8mの方形に近く、四柱穴で東壁中心部に埋甕炉が設けられその初現を示す。

恒川式土器を伴出した第4号址は長軸4.3mの小型長方形を呈し四柱穴で、中央北寄りに埋甕炉が設けられていた。(図10、11、12。 図版6-2。18-1)。

第1号址出土の土器は、壺、甕、深鉢、高杯浅鉢(図版3)、ミニチュア土器2点を伴い、計13点を数える。細口壺、小形台付壺には朱彩を施したものがあり、施文は、回転縄文、櫛書き沈線文、櫛描きによる短線文、斜線文、杉綾文が肩部、口縁部、口唇部に施される(図版6の下)。胴部全面に縄文や地文にへら描沈線文によるコの字重ね文様を施す、台付甕(図8、図版4)がある。また赤色塗彩の壺や篋描沈線文、簾状文が施された甕が多い。

またこれとは別で第9号第10号住居址出土の土器のように胴部に沈線の綾杉文や口縁に縄文帯がつけられ、横走する簾状文や細い櫛描波状文が盛行する1群(図版7。図11、12)がある。

これは恒川式古式に類似しているが、また一面天王垣外式や海戸系の要素を持ち、両者の影響を受けた土器と思われる。以上の住居址群は、同類住居址の最北部を示しており、これに引き続いて南接する地籍に集落の中心部が存在すると見られる。今後の探査を期待したい。上伊那地域の縄文から弥生への変革を物語る極めて重要な遺跡と思われる。

## 2. 古墳時代の竜神祭祀について

古墳時代の後期の屋内祭祀跡は学界初見の例である。戦後期の開田工事により包含層を攪乱された第3号住居址は、幸いにも西壁に造りつけられた石芯粘土製の竈(以下 カマドと記す)が残され、焚口手前の床面から壁にかけて20数個の土師器が蟬集状態で出土した。(図版8-1~5)器種別に記すと、焚口手前に扁円筒形土製品、その右にエボシ形、その西側依りに甕8個、壺1個、鉢1個、椀2個、高杯1個、(図版9・12-1、4)須恵器の蓋付坏3個、坏1個、ハソウ1個、(図18 図版19-5、6、7、8)、覆土中から石製勾玉であった。出土した土師器、須恵器共に古墳時代第V期末の所産である。

土師器の中にある長胴のエボシ形甕等は、伝統的な短胴形のものを加え甕8個の蟬集状態で、古事記のヤマタノオロチの条の酒八槽を想わせ、祭祀状況を表わすものと考えられ、加えて石製模造品に近い蛇紋岩様石質を加工した勾玉、須恵のハソウ、蓋付坏、土師の甕



等は祭器としての性格が強いことからみて祭祀遺構として良いであろう。就中、カマド焚口前から出土した扁円筒形土製品は(図10 図版11)、長さ47.5cm円筒の長径13cm、短径7cmを測る。器厚11mm、片面の中軸線の中央部に径7mmの穴が4箇直列して穿れ、表面はヘラ磨きが施されるが、内面は輪積みのままで僅かに調整痕が認められる程度である。全面赤褐色を呈し、焼成は良好である。同類品は全国的に見てその出土数は稀少であり、僅かに大阪府陶村遺跡出土の10数点が知られ、その他奈良県、和歌山県等に単品で出土している。但し本品のように穿孔は認められず、全く無孔である点が異なる。表面の中軸線に沿って直列する4箇の孔は、祭祀の際に斎串を樹立させるためのものと考えられる。特にカマドの神として古くは延喜式第八に記載される京都府平野神社はカマド神奉祭の官宮社として知られるが四座(今木神、久度神、古閑神、比売神)で四神を祀る。本品の4孔は四神の斎串の孔と想定することができる。出土位置がカマドの焚口前であり、焚口天井部に置かれたものであることが推定されるのである。現代においても実施されている下伊那郡南信濃村の重要民俗資料(国指定)「遠山の霜月祭」においての「湯立神楽」のカマドは焚口の天井部に粘土塊を置き御幣を樹てる事例があり、類似の方法と思われるのである。

また、本県におけるカマド出土例は1000個体を超えるが、いわゆる韓カマドは僅かに3例であり皆無に等しい。この点、畿内を中心とする西日本各県における出土数と比較する時、大きな格差を示している。この格差が7世紀以前における格差であるとすればカマドを伝来した渡来人の出自によるものと考えられる。積石塚古墳群の源流の如何を問う問題と共に信濃の古墳文化の底流を把握する上に重要な問題であろう。

また第3号住居址、第5号住居址に見られるカマド双設は、韓カマド出土皆無の現象に対応する現象であり、平野神社祭神に見られる久度神、古閑神祭祀を意味するものと思われるが今後の研究に待ちたい。また第7号址は廃棄前に整理されているが同期と思える。

ついでに、平安時代住居址の存在にも触れておきたい。第6号住居址、第10号住居址は平安時代後期の住居址である。第3、第5、第7号住居址のように7世紀初頭の集落に比べその大きさを拡大したようである。また南宋製白磁鉢の発見は破片ながら北殿のルートとしての「殿村」とよばれた中世大ムラの文化的経済的高さ示し「諏訪」信仰圏の一翼を担っていたことを示す遺跡として、歴史的文化的にその価値は極めて高いものがあり、今後村行政における文化財保護の立場からの施策に期待することが大きい。

### 3. 古墳時代初頭の土器について

古墳時代古式土器出土についてである。

今次発掘調査地点の北方30mの地籍に位置する有賀氏栽培の梨園の耕作中に出土し採集された壺形土器が同家に保存されていた。加えて同じ出土地点から径40cm内外の平石44点が採集保管されているが、壺の原位置と平石群の関係は同位置であったとの耕作者の証言がある。

この土器(図29-4、図版19-1)は、胴部は球形(径26cm)を呈し、頸部は径8cmの

細形であるが立ち上りから折損していて口縁部器形は不祥であるが恐らくS字状口縁にリ飾られたいわゆるバレススタイルの壺形土器であろう。器面に施文はないが、平滑に磨かれた器体全面に朱彩が施されており、やや風化しているがその残痕が認められる。恐らく当時、関西または東海方面から搬入されたもので、その路線は古東山道の神坂峠越えによってこの地にもたらされたものと推定される。松本平ではこの時、県内最古の大型古墳、弘法山古墳が築造されており、初期古墳文化の信濃への波及は明確である。同類土器は、伊那谷では飯田市座光寺の恒川遺跡から出土しており、弥生時代遺跡の性格が北垣外と対比し得ることと併せて重要な研究課題を提供している。

またこの土器の胴部破損は意識的な穿孔加工で、人面を表現し呪性の機能を持つと推定される。前述のように出土の安山岩製平石44個の存在は注目すべきことである。出土状態は耕作中の漸時発見であるが、およそ10m平方の範囲に一定の間隔で配置されていたという。

集積状態ではなく、配置状態であり、一種の配石遺構と思われる。その中に3点であるが、縁辺部に浅いレリーフによって青海波文を描き出したもの(図版23)があり、祭器または呪性を感じられる。施文された自然石(河原石)の配石遺構とすれば、古代祭祀の「磐座」(いわくら)となり、朱彩壺形土器は降臨した神への捧げものとなる。

農耕民の祭祀として稲霊を祀るのが通例であるので、このような推定が可能である。いずれにしても上伊那地域への古墳文化の浸透ぶりを示す極めて貴重な土器である。同類の遺構が近くに埋存する可能性が高い。

末尾ながら本稿を了わるに当たり、扁円筒形土製品の出土例等について御教示を賜った奈良大学教授水野正好先生、本遺跡の調査に多大の予算を負担された地主の有賀満氏および記録保存事業について指導された県教育委員会文化課市沢指導主事、村教育委員会社会教育課松沢英太郎主事をはじめ村文化財保護行政関係各位に深く謝意を表す次第である。

(調査団団長 林 茂樹)

[注]

- (1) 駒ヶ根市教育委員会「荒神沢遺跡」
- (2) 太田保「中川村刈谷原遺跡の一括出土土器について」長野県考古学会誌10 1971
- (3) 神村透他「北原遺跡」 1972
- (4) 宮沢恒之「飯田市恒川遺跡」長野県考古学会誌所収 1972
- (5) 桐原 健「点描、信濃の古代」信毎書籍 1992
- (6) 中村 浩、他「原山古墓群の調査」「陶邑Ⅶ」大阪府教育委員会所収 1990
- (7) 片町国直、他「霜月祭」南信濃村史遠山所収 1976
- (8) 水野正好「甕形一 日本古代竜神の周辺」古代研究24号所収 1982
- (9) 宮坂光昭「千鹿頭社Ⅳ」諏訪市教育委員会 1991



# 版 圖

図版 1



遺跡近景 南方より



遺跡近景下段 南方より



壺出土状況

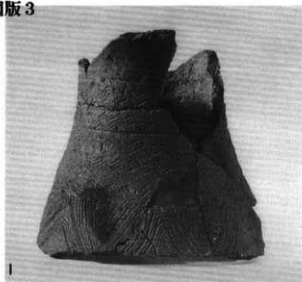


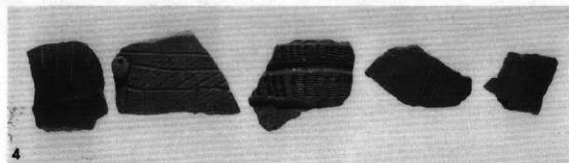
炉址



第1号住居址全景 西方より

図版 3

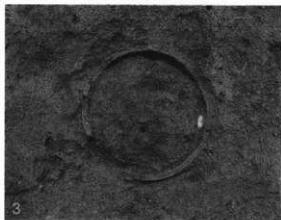




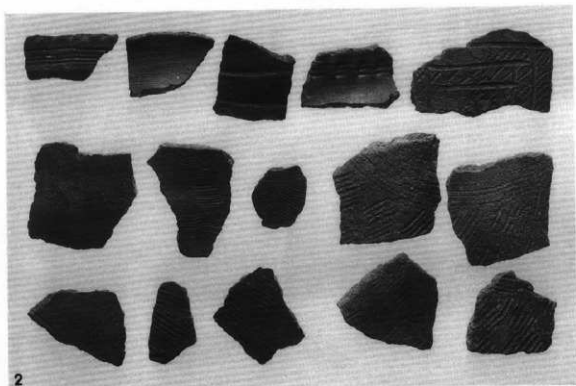
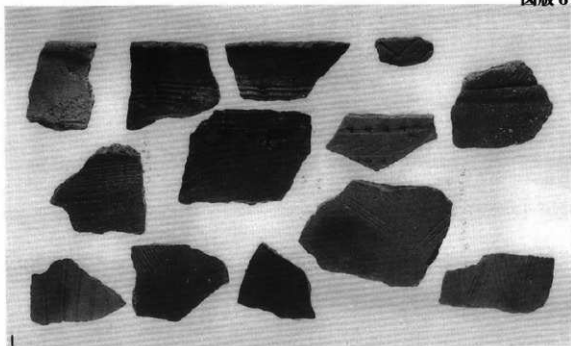
1. 第2号住居址 (上) 東方より (下) 出土土器



図版 5

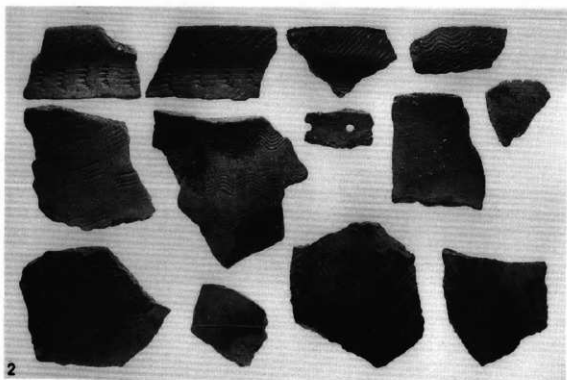
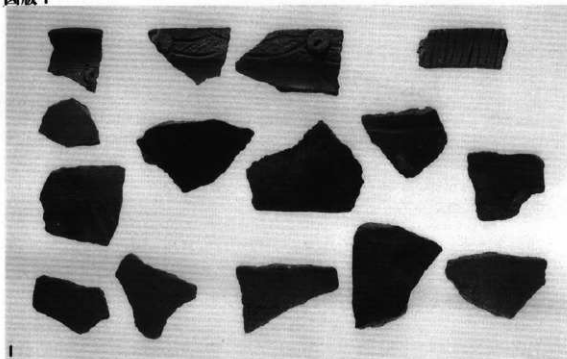


1. 第4号住居址 北方より 2.3. 埋甕炉 4. 石器出土状況



1. 第1号住居址覆土出土 2. 第4号住居址覆土出土

图版 7



1. 第9号住居址上面出土弥生土器片

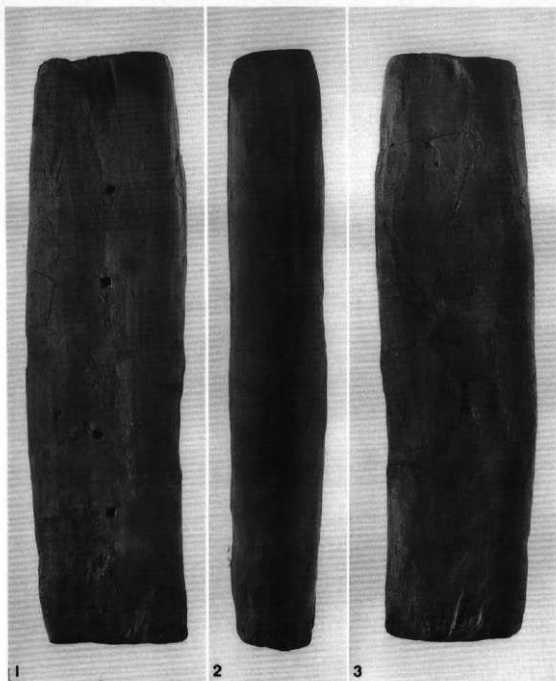
2. 第10号住居址上面出土弥生土器片



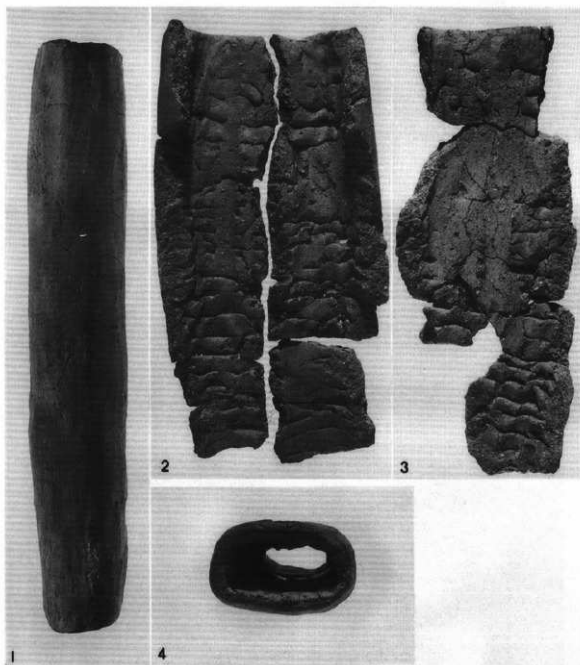
第3号住居址出土状況

1.カマド前部 2.焚口 3.扁円筒形土製品出土状況 4.カマド左床面 5.須恵器ソウ出土状況

図版 9



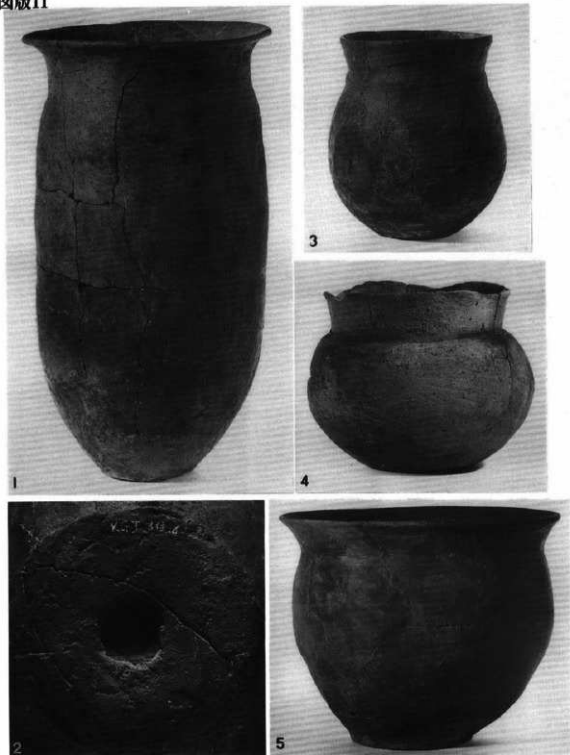
第3号住居址出土扁円筒形土製品



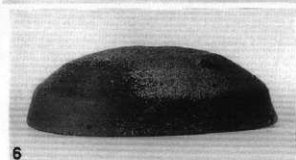
第3号住居址出土扁円筒形土製品

1. 側面 2.3. 内面 4. 開口部

図版11



第3号住居址出土土器 2. 1の底部

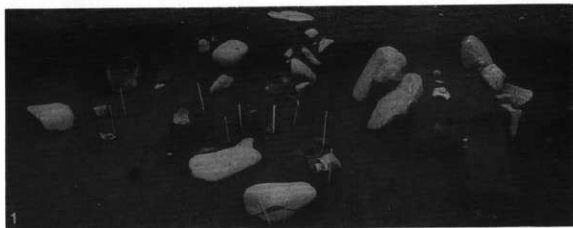


第3号住居址出土土器 1~4. 土師器 5~8. 須恵器





1. 第5・7・8号住居址 東方から 2. 第7・8号住居址投げ込み磔



第5号住居址発掘状況

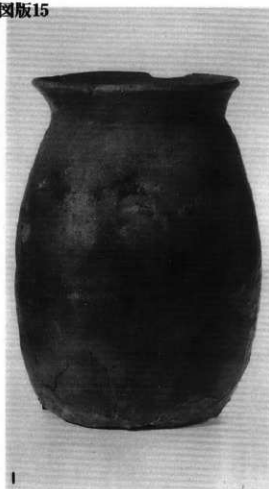
1. カマド並列出土状況  
5. B号カマド址焚口部

2. A号カマド址

3. B号カマド址側面

4. B号カマド址土器出土状況

图版15



第5号住居址出土土器



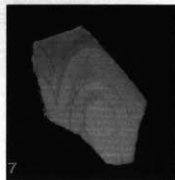
1 第5号住居址出土土器



2.3 第10号住居址出土土器



4.5 第10号住居址出土土器



6.7 第3号住居址上面出土遺物

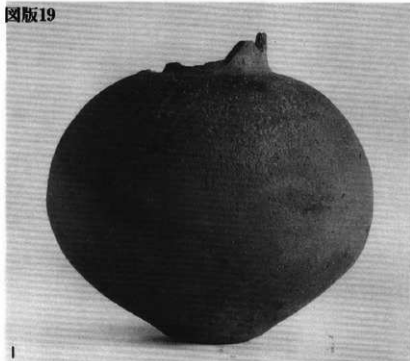
图版17





1. 第4号住居址埋燵炉 2. T-7グリット出土 3. 各グリット出土弥生式土器片  
4. 第1号堀立柱建物址 北方より

図版19



1



2



3



4

遺構外出土遺物

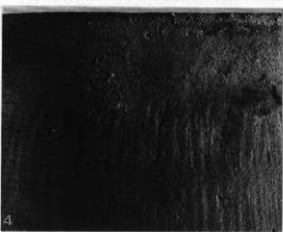
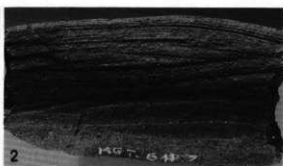
1.2. 調査区隣接地区出土土器 3. 第6号住居址上層出土紡錘車 4. グリット出土弥生土器口縁部内側



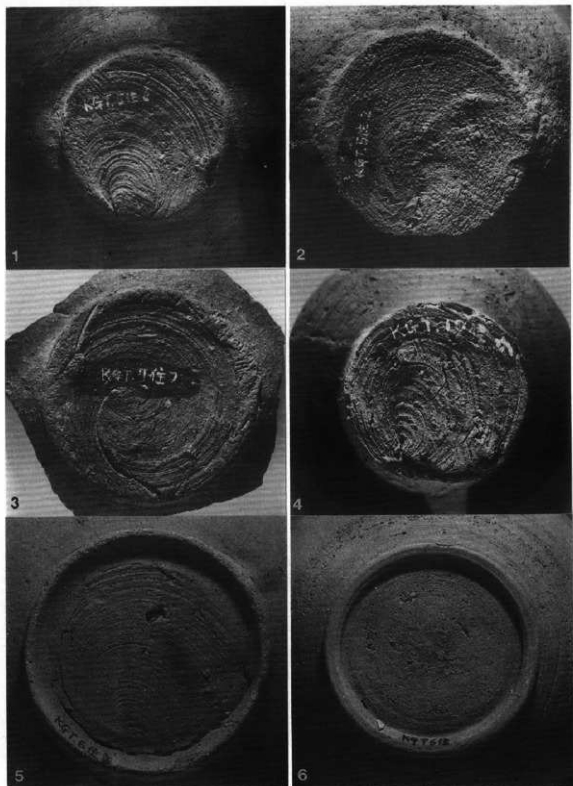
北垣外出土かめ調整痕 2.4. 内面



図版21

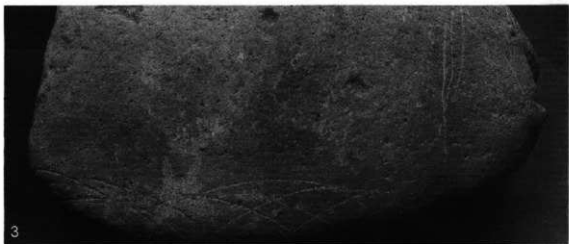
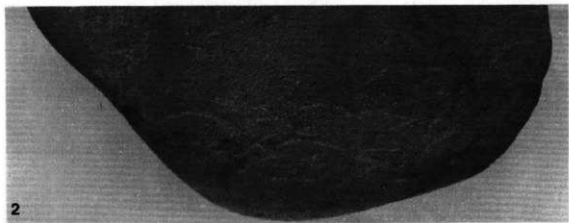
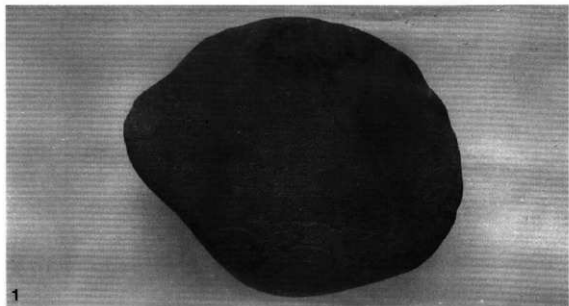


北垣外出土かめ調整痕 2.6. 内面



1~5. 土師器底部 6. 灰釉・高台

図版23



青海波文線刻磬（19図版土師器と共に出土。3は長さ32cm）

## 北垣外遺跡

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘  
調査報告書

平成4年11月 発行

発 行

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

印 刷 関小松総合印刷

